

源氏物語における“隴写法”

竹 村 義 一

The Euphemistic Expression in the Genji-monogatari

Giichi TAKEMURA

(昭和38年11月15日受理)

1 主 語 の 省 略

源氏物語の文章が難解であることは、古来一つの定評となっている。今はなき作家正宗白鳥の「源氏物語は原文で読むよりも英訳で読んだ方がわかりやすい」という言葉は、彼一流の警句には違いないが、それは至極妥当な提言だとも言えよう。その源氏物語の文章の難解の要因の一つは主語の省略にある。もとより、主語の省略は、日本語一般の一つの特徴であるが、源氏物語においては、とくに顕著である。源氏物語における主語の省略は、いかなる性質のものであり、どのような特徴をもっているかを、みてみよう。この物語の冒頭の部分を例として取ることにする。さて、私は一般に言われているように、「主語の省略」というテーマを立てた。しかし実際に、この物語の文章をみていくと、それは単に主語だけの省略ではなく、補語や客語や修飾語が省略されることも、しばしばある。だから、「人物をあらわす語」の省略、というのが妥当であるかもしれない。

次にあげる文中、人物をあらわす語には下線を付し、省略されたものは〔 〕をつけて補い、下に点線をつけ、それぞれ番号をつけた。桐更は桐壺の更衣の略。主は主語、客は客語、補は補語の略。

1. いづれの御時にか、^(主)女御更衣¹あまた侍ひ給ひける中に、いとやむごとなき際にはあらぬ^{注1}〔方^(主)〕が、すぐれて時めき給ふ^(主)〔〔方=桐更〕〕ありけり。
^(-a) ^(-b)
2. はじめより、われはと思ひあがり給へる^(主)御方々²、〔桐更^(客)ヲ^(二)〕めざましきものに^(主)貶しめ嫉み給ふ。
3. ^(主)同じ程、それより下臈の更衣³たちは、まして安からず。
4. ^(主)〔桐更ハ^(三)〕朝夕の宮仕へにつけても、^{注2}人^(主)の心をのみ動かし、恨みを負ふ積りにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、〔帝ハ^(主)〕いよいよ飽かずあはれなるものに思ほして、^{注3}人^(主)の誇りをも、え憚らせ給はず、世の例にもなりぬべき御もてなしなり。
5. ^(主)上達部⁴上人なども、あいなく目をそばめつつ、いとまばゆき^{注4}人^(主)の御おほえなり。
6. 唐土にも、かかる事の起りにこそ、世も乱れ悪しかりけれと、〔帝ノ桐更ヘノ愛ハ^(主)〕
^(五)やうやう天の下にもあぢきなう、^{注5}人^(主)のもて悩みぐさになりて、楊貴妃の例も引き出でつ

べうなりゆくに、いとはしたなき事多かれど、^(主)〔桐更ハ〕かたじけなき^{注6}〔帝ノ〕御心ばへ^(七)の類なきを頼みにて、交らひ給ふ。

7. ^(主)父の大納言は亡くなりて、^(主)母北⁶の方なむ、いにしへの人の由あるにて、親打ち具し、
^(補)さし当りて世のおぼえ花やかなる御方々⁷にもいたう劣らず、何事の儀式をも、もてなし
 給ひけれど、取り立てて、はかばかしき後見しなければ、こととある時は、^(主)〔桐更ハ〕^(八)
 なほ抛り所なく心細げなり。

注1. 引用文1の中の「いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり」の中の助詞「が」は接続助詞ではなくて、格助詞であって主格を示す「が」であると島津久基氏(対訳源氏物語講話 巻1 p. 9 初版昭和5年)ら多くの人々によって解されている。「あらぬ(方=人)が」と名詞を補う、その場合、あとに来る「時めき給ふ」の次には、「方=人」を補う説と、「事」を補う説とがある。

前者だと「時に高貴な身分でない方が、帝の寵愛を受け栄えておられる方があった」と現代の口語の表現にはない口語訳になってしまうので、はじめの「方が」を「方で」とし、「特に高貴な身分ではない方で、帝のご寵愛を受けておられる方があった」と並立的に訳す。(今泉忠義・石沢胖著「源氏物語の解釈と文法」による)

後者だと「……方が、……事があった」となる。松尾聰氏は「全訳源氏物語 p. 6」で次のように述べる。「…事が省かれている説は、「ありけり」に敬意が添っていないから、主語は「人」ではありえないとする立場を主とするものであるが、この程度の身分の人については敬語は間々省く例はむしろ普通であるし、又上に「時めき給ふ」とあって、敬意は適当に払ってあるのでもあるから、ここには敢えて添えなかったともみられるので、必ずしも有力ではない。」

前者にしたがえば「方=人」が二カ所、後者でも、「あらぬが」のところ一カ所が省略された形となる。

なお、山岸徳平氏は「あらぬが」の「が」は、格序詞の中、指定格(中止格とも言うべきもの)に所属せしむべきものである、として次の如く言う。(岩波 日本古典文学大系 源氏物語 1 p. 422)

“やんごとなき際にはあらぬが(人で)、すぐれて時めき給ふ(方=人)ありけり。”と補い、この「が」は、指定格で、「物で・物にて・物にして」に相当する機能を示している。…「物」の代りに「人・事・様」など・前後の関係で、適当な名詞が考慮せられるべきである。”

山岸氏の説も、人物(桐壺の更衣という)を示す言葉が省略された形になっているという意味においては、その前に挙げた説と同じある。ここは省略主語の例としては1に計算する。(山岸氏の指定格説には疑義があり、賛成しがたいが、今はそれには触れない)

注2. 引用文4の「人の心」の「人」について。この「人」は注3(引用文4)「人の誇り」注5「人のもて悩みぐさ」(引用文6)の人と大体同じ意味で、「人間一般を」を指すもので、「自分以外の人、他人、世人」という意味内容を持っていると考えられる。ただし、内容として包括する人間集団の広狭大小の差は、用例によって差が出てくる。注2

の「朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし」の人は、必然的に天皇の寵愛を争う敵方の人、他の女御更衣のこととなり、広くは、その女御更衣を取りまく人々をも含むこととなる。したがって次のような口語訳や註があらわれてくる。

他の女官達の氣ばかり揉ませ（島津氏前記本 昭和5年発行）

他の女御更衣達に氣を揉ませ（吉沢義則著 対校源氏物語新釈 巻1 p. 1 昭和12年発行）

朋輩方の氣を悪くしたり（谷崎潤一郎訳 源氏物語 巻1 p. 2 昭和14年発行・昭和26年新訳版も同じ）

女御・更衣（傍註）（山岸徳平氏 前記岩波 大系本 p. 27 昭和33年1月発行）

方々の心をゆるがせてばかりいて（松尾聰著 全釈源氏物語〔前出〕巻1 p. 4 昭和33年3月発行）

これに対して、次のグループは、「人」を限定しないで漠然と一般的に原文通り「人」あるいは「他人」としている。

人に不安の念を起させる種になり（藤井紫影ら4人著 新釈源氏物語巻之一 p. 4 沼波瓊音講・明治44年発行）

人の氣を揉ませ（金子元臣著 定本源氏物語新解 上巻 p. 1 大正14年発行）

他人の氣ばかりもませ（朝日古典全書・池田亀鑑著 源氏物語 巻1 p. 151 昭和21年発行）

この「人の心」の「人」は具体的に何を指すかを、前後の関係からつきつめていくと「他の女御更衣方」ということになる。しかし、口語訳とする場合（「注」の場合はまた別であるが）に、そこまで行ってしまうのは、いかがなものであろうか。この場合の作者の表現意識としては、桐壺の更衣を中心として、「更衣以外の人」という程度の気持ではなかろうか。

注3. この「人の誇り」の「人」は「人一般で、「他人、世の人」の意と考えられる。「世の例にも」という言葉と照応しているので、注2の「人」よりは、包括内容は、ずっと広いと考えられる。

注4. 「人の御おぼえ」の「人」が桐壺の更衣を指すことは、諸学者の一致した意見である。沼波瓊音氏は、いち早く、前記の「新釈」で、「人は更衣を軽くさしたる語」と言っている。山岸氏は前記岩波の大系本の補注10で、次のように言う。

“「人の」は、「更衣の」とあるべきを、抽象的に「人の」とした。この類の抽象的用語には、「人・物・事」の三語が最も多い……”

特殊を一般化した表現で、“ほかした” 感じを受ける。これは人物名を省略するのでは、ないが、人物名を直接的に明示しないで、間接的な“ほかした”表現ということができよう。

注5. この「人のもて悩みぐさ」の「人」は、「天の下にもあぢきなう」と照応しているので、「天下の人々」という広い意味であることが、はっきりしてくる。

さて前記引用文に現われた人物を表わす語の中で、明示されているものを第1類、省略されているものを第2類、「人の御おぼえ」のような“ほかした”表現を第3類とする。この基準で分類すると、次のようになる。

第1類 人物を明示している場合

- A 主語の場合 1 女御更衣 2 御方々(女御更衣) 3 更衣たち(同じ程 それより下臈の) 4 上達部上人 5 父の大納言 6 母北の方……………計 6
- B 補語の場合 7 御方々(女御更衣)……………計 1
- 第2類 人物名が省略されている場合
- A 主語の場合 一 方=人(桐更) 三 桐更 四 帝(桐壺帝) 五 帝の桐更への愛 六 桐更 八 桐更……………計 6
- B 客語の場合 二 桐更……………計 1
- C 修飾語(連体)の場合 七 帝ノ(御心ばえ)

注6. 「かたじけなき〔帝ノ〕御心ばへ」の場合、「かたじけなし」という形容詞は高貴の人に用いるものであり、「心ばへ」に冠してある「御」という敬意を表わす接頭語によって、十分「帝ノ」という意味はわかるのであるが、やはり厳密に言えば「帝ノ」が省略された形と見ることができる。

第3類 ぼかした表現

注4の「人の御おぼえ」の人(桐更)。

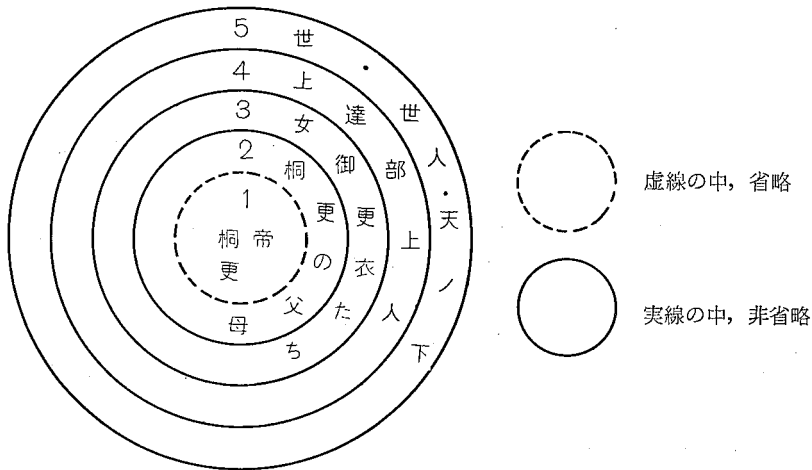
なお注2注3注5の「人」は特定の人物とは、みなさないでもよいので、この場合は対象から除外することとする。

上の分類をみると、次のように言うことができる。

- 1 「帝」と「桐壺の更衣」の二者は全部省略される。
- 2 「女御更衣たち」(桐壺の更衣とは対立的存在として現われる)は例外なしに明示される。「上達部上人」(この場合、桐壺の更衣とは反対的立場になって現われる)も明示されている。
- 3 「父の大納言」「母北の方」は、桐壺の更衣方であるが、これらは明示することによって、桐壺の更衣は省略されている。(引用文7において、〔桐更ハ〕という主語を終りの方に補ったが、じつは、この文のはじめに“〔桐更ハ〕父の大納言は亡くなりて…”あるいは“〔桐更ノ〕父の大納言は亡くなりて…”と桐更が省略されており、暗に示されているのである。)

4 “ぼかす”言い方は、「人の御おぼえ」の桐壺の更衣の場合に顕著に現われている。

さて上記1. 2に見られるように、帝と桐壺の更衣は全部省略されており、「他の女御更衣たち」は全部明示されている。そして、この両者は帝の桐壺の更衣への愛を中心にして、全く対立している。そして、この段の主題は、帝の桐壺の更衣に対する愛である。したがって、この段の「主人公」、「主格になる人物」は帝と桐壺の更衣である。故に、「物語の主語が省略されている」ということができる。帝および更衣(桐壺の更衣)なる語は、一つも出て来ないのである。そして、それは、「非主語の明示、副人物の非省略」によって、なされているのである。それは「非主語の明示による主語の暗示」ということができる。これを図式すると次の如くなる。



このような物語の主人公に対する省略・暗示・婉曲・間接的な表現に対して、すでに早く、明治の末に沼波瓊音氏は前記の「新釈源氏物語」のこの段の評に興味深い観察と意見を述べているので、やや長きに失するが、引用することとする。（同書 p. 4～5）（原文のまま）

（評）始めてこの物語を繙く人は、先づ文章の切目が朦朧として、断えむとしては続き続いて、端なき糸を手繰るやうなのに、焦慮（やきもき）するであらう。併しよく翫味して見給へ、その朦朧たる所に一種の趣味もあり一種の便宜もあることが解る。又人名が無いのも印象の不明を来す点にもなろう、現にこの主人公たる女官の名が無く、唯僅に「同じ程其れより下屬の更衣達」と記して、其女官の更衣なることを示したのみである。名を記さぬのは滅多に名を呼ばぬ風習であったから、其風習が其儘この小説に現はれて居るのである。それは此作者紫式部の本名が今以て不明だと云ふのでも解る。そこで読者は便宜上或名称を人物に付して置く必要がある。古来の例ではこの更衣を「桐壺の更衣」といひ、帝を「桐壺の帝」と称へて居る。この女官の更衣たることを知るにも前記の句から推知すると云ふ有様だから、余程綿密に注意して読まねと、忽ち五里霧中に彷徨して仕舞ふ。又主格が略されて居る所が多い為に捕捉し難しとの嘆を發するであらう。これも読み慣れると、云はなくても解ってる所が省略してあるので、却ってキビキビと心持よく、漸次この時代の思想式が染込んで、容易に解釈し得るに至るのである。

まことに活眼卓見というべきである。先学沼波氏の言葉にしたがって、すこしく、この冒頭の文章を辿ってみよう。

まず「いづれの御（おほん）時」の「御時」は「御代」「大御代（おほみよ）」であり「帝の御治世」の意である。ここには帝の意味が含まれており、暗に示される。

「女御更衣あまた侍ひ給ひける…」の、女御は中宮に次ぐ天皇の夫人（妃）、更衣は女御に次ぐ天皇の夫人である。「御時」が一般的政治的内容を持つのに対して、この条は、

帝の私生活内容を含んでいる。そして、ここまでで、女御更衣の存在とともに、帝の存在が暗に示される。「いとやむごとなき際にはあらぬがすぐれて時めき給ふありけり」では、この人物は、女御更衣の中に限定される。そしてその中の上流ではないことがわかる。それは「われはと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに貶しめ嫉み給ふ」でさらに、はっきりする。続いて、「同じ程、それより下臈の更衣たちは、まして安からず」で、「下流」ではないこと、および「更衣」であることが明きらかになる。「中流の更衣」という結論に、ようやく達するのである。それは直接的直線的表現によってでなく、間接的婉曲的方法によって到達するのである。主人物(主格)の省略、間接的表現により、そこに生ずる陰影は、物語の雰囲気や情を醸成して複雑なデリカシーを生み出す。はじめに、私は「主語の省略」というテーマを立て、途中で、「人物を表わす語」の省略というように改めたのであったが、今まで見て来たところでは、結局、また元へ帰って、それは「主語」の省略が主軸になっていることを確かめることになった次第である。なお、この問題について調査検討すべきことは多いけれども、一応これまでとして、これと関連のある「人物の呼び方」について見てみたい。

2 人物の呼び方

源氏物語を、後世の私たちが読んで、第一に抵抗を感じるのは「主語、すなわち人物名の省略」であるとともに、人物名、人物の呼び方の特殊な表現法である。このことについては、さきに引用した沼波氏も触れておられるが、五十嵐博士が「新国文学史(文章の第三の特色、その簡写式なる点の項で)」で、つとに論じておられる。

“多くの人物を、殆ど固有名詞なしに写し了せた事。固有名詞の本名を有ってゐるのは、惟光・良清・朱雀・冷泉等極めて少数の人物だけでその他は、官位・歌・住所・綽名を以てはのめかされてゐる事。”(同書 p. 238)

このことは芳賀矢一博士も著書「国語と国民性」の中で「源氏物語に於ては、惟光の如き下賤なもの以外は、本名を言はぬ風がある。」(同書 p. 24)と言われている。

また手塚昇氏も、源氏物語の文章の欠点として、その第一の項に、「人物の名が姫、上、君、殿とかの代名詞で、それが何の人物を意味するか、理解が困難である事、又官位で呼ぶ場合、その官位の移動があり…」(源氏物語の新研究 p. 364)と述べている。このことは、上記の人々の説をまつまでもなく誰でもが感得するところである。では、何が作者をそうさせたか、について以上三氏の意見をみよう。

五十嵐博士。“紫式部が固有名詞を用いなかったのは、一つは当時の習慣によつたので、一つは、より多く暗示的ならむためであつたかと思われる。……源氏は大体当時の大宮人をモデルにしたので、其の官位を挙げ容貌を示し住処を示せば……それが誰であるか、時の人には分つたであらう……なまなか固有名詞を付けるのは差障りあるのみならず、注意を外らし、興味を減ずる所以ともなつたであらう”と博士が執筆されたころの明治時代の例を挙げ、“今を以て古を律する事は出来ぬが”と言っている(前出書 p. 240)芳賀博士。“我が国民性の一つとして物事を美しく言ひ、敬語も自ら、さう云ふ所から出てゐると思ふ。……源氏物語に、下賤なもの(惟光)以外に本名を言はぬのは、敬語

的表現法であり、物事を美化して表現する仕方に帰せられ、それは国民性の一つである。(前出書の、前記と同じ所)

手塚氏。官位の移動が断りなしに行なわれ、人物が無警告に他の人物に移るなどの難解さに就いて後人の註疏を予期してある程度まで、わざと難解にしたらしい。

五十嵐博士のモデル論は、池田亀鑑博士の「源氏物語はモデルを有してはいるが、併しモデル自身ではない」(日本文学大辞典) モデルとの密着性はさして強くはなからうと言っているように、五十嵐博士の考え過ぎではあるまいか。芳賀博士の敬語説は穏当であるが、“ものを美化する”という一般的国民性の他に、その時代の生活における官位のもつ意味の大きさということに基礎があるのではなからうか。手塚氏の説は、物語に現われた作者の生き方、芸術観に、そんな遊戯的傾向を見出だすことは困難と思われる。

この固有名詞省略の問題は、いかに解釈すべきであろうか。いささか卑見を述べてみたい。まず第一に、五十嵐博士も言っておられるように、当時の生活習慣をあげねばならない。少なくとも、この物語に現われたところでは、人は本名によって生活していないのである。彼は、その生涯を、幼にしては父の、長じては自己の官名・身分によって生きているのである。身分というものが、いかに大きな圧力を持っていたかは、明石の上の一生の苦悩を見ればわかる。大臣の女であるか、大納言の女であるかによって、彼の女の宮仕えが、いかに懸隔したものであるかは、桐壺の更衣と弘徽殿の女御との対比によっても明きらかである。このことは当時の社会・身分の制度と、それに規定される人のものの考え方とに基礎を求められるべきであろう。それと同時に、一般的国民性に根ざす美的表現傾向、敬語法的思考方法が重視されねばならないことは勿論であって、これは芳賀博士の説の如くである。

かくして、この物語における、官位による人物名の表現を当時の時代生活の反映だと考えざるを得ない。彼らは本名をもって生きたのではない、官名によって生きたのである。実生活の行動のみでなく、思考方法も、官名をもってし、人を考えるにも官名をもってした。したがって自分自身の存在が、官名的存在であるとともに、他の人をも官名的存在として遇した。しかも身分は細かく分たれ、それぞれ「限り」があった。そしてこの官名的思考表現方法に、美的敬語的傾向が加わる。この二つの結合の上に立つ時代人の思考・感情の反映が、源氏物語に、かくの如き形をとって現われたのである。ここに紫式部の芸術的方法である。写実、というより、真実追求の一つの表われがある。そして、それが、表現方法として、間接的手法臚写方法をとらせたのである。そして大切なことは、そのような表現方法が、作品内容に、いかなる効果をもつかということである。そして、われわれは、源氏物語を流れる「情趣」に対して、この間接的臚化式方法が、緊密に調和して、効果的に役立っていることを見出だす。

ことに例外ともいふべき、惟光の場合、一般的な官名表示・間接的表現に対して、この直接的表現は、鋭角的な対照を示している。軟調のみやびやかな連続的文章の中に、突如として現われる「惟光参れり」の短句は、強いアクセントとなって情趣的雰囲気を引き立てる。

3 いわゆる「実事」の表現について

源氏物語の簡化式表現方法について、「主語の省略」「人物の呼び方」について見てきたのであるが、その手法は、男女間のいわゆる「実事」の表現にも強く出ている。男女が相逢うた事の表現は、きわめておぼろであって、帚木の巻の、中川の紀の守邸で源氏が空蟬に逢うたことについてすら、古来疑問をさしはさむ学者もある（島津久基氏も対訳源氏物語講話（巻2 p. 92）で触れておられる）空蟬が源氏に逢うたあとの心理および言葉として「見ざらましかば」「よし今は見きとなかけそ」という表現が出てくるが、この時代には、男女が近く相見るということは、その間に情事があったことを意味する。したがって、その場合、「実事」のあった描写、表現は省略しても、読者には、そのことが諒解できるのである。そして作者は、男と女が近々と相見ても実事のなかった場合は、必ずそのことを明記している。その例をあげると、

第1例 賢木の巻で、源氏と藤壺の二人の近く見る場面（夜が明けて源氏が塗籠にかくれる事件のある条）藤壺は源氏を拒否する。

宮（藤壺）いとこよなくもてはなれ聞え給ひてはてはては御胸をいたう悩み給へば、
近う侍ひつる命婦・弁などぞ、あさましう見奉り給ふ。

そして塗籠に閉じこめられ、翌日の夜、また源氏は情を訴えるが、藤壺は打ち解けない。「いとよう宣い遅れて今宵も明けゆく」と明白に、「実事」のなかったことを記述している。

第2例 夕霧の巻、夕霧と落葉の宮との場合。

（夕霧）「御許しあらでは更に更に」といとけざやかに聞え給ふほど、明け方近うな
りにけり。

「実事」なくして夜の明けたことを明白に記している。また「明かさで出で給へ」という落葉の宮に夕霧のいう言葉「あさましや、事あり顔に分け侍らむ朝露の思はむ所よ」によって「事ありげな場合」に「事のなかったこと」を表わしている。そしてこの夜両者が歌のやりとりをする「濡衣問答」によっても、一層明きらかにされている。

第3例 総角の巻、薫と大君の場合。

事なくて明けて別れんとする条の、薫のことは「事あり顔に朝露もえ分け侍るまじ……」も、第2例と同じケースである。

第4例 総角の巻 薫と中君の場合。

前例のあとのところに出てくる場面で、大君の寝所へ薫がはいると大君は逃げる。あとに残された中君を、薫ははじめ大君と思うが、違っていたことがわかる。後の方に出てくる叙述「この一と節はなほ過して……例の（いつも大君となさるる）をかしく懐しき様に語らひて明かし給ひつ」および「人遣りならず飽かぬ心地して…」などによって、大君とも未だ「実事」がないように、中君ともなかったことを示している。

第5例 紅葉賀の巻、源氏と紫の上との間。これは、これまでの男女の夜の場面とはやや違うが、源氏が紫の上を引き取って間もないころのこと、「いとかう世づかぬ御添臥しならむとは（殿のうちの人々も）思ひも寄らざりけり」という記述がある。この場合も、「実事」のあることを一般の人々は信じており、かつ信じるのが当時の社会通念であった。

ここでも作者は周倒な用意をもって断っている。

第6例 槿の巻の源氏対槿の君との場合。

以上の諸例は同一ケースであり、実事ありと見なすべき場合、実事なかりし時は、実事なかりしことを作者は必ず記述している。“一の定理に対して、その終結を否定したものを仮設とし、仮設を否定したものを終結とするところの「対偶」(contraposition)は必ず真である”ことは、幾何学の教えるところである。これにしたがって、右の定理の対偶を作ると、

“実事ありと見做すべき場合、実事なかりしことを示していない時は、必ず実事があったのである。”

となる。この定理をもってすれば、さきの空蟬の場合も、とくに実事を否定する叙述がない以上、実事ありしことを論断できる、というべきであろう。もちろん空蟬の場合は、他の記述によって、それは明きらかであるが……。

ここに、私は、構想上の間接的表現をみる。円の中心を示すに、その周をもってする方法である。これは単なる臆化ではない。光を描くに影をもってする方法である。主格を示すに副人物をもってする方法である。人物を示すのに直接的に人名そのものをもってせず。官位、住居、和歌の中の言葉などをもってする方法である。それは直接的、第一次元的なものではなく、また単なる軟調の“おぼめかし”でもない、非直接的な高次元的表现方法である。

(高知女子大学 国文学研究室)